

## 抄 録

## 岡山醫科大學歐文業府第7卷第3號邦文抄録

## 帯狀疱疹に關する統計的觀察

皮膚科泌尿器科 黒山 眞吾

昭和3年より同12年に至る滿10箇年間に岡山醫科大學皮膚科泌尿器科教室を訪れたる帯狀疱疹患者126名に就て統計的觀察を行ひたり。即ち該10年間に於ける皮膚科新來患者(淋疾以外の性病を含む)は18403名(男10596名,女7807名)にして、帯狀疱疹患者126名(男78名,女48名)は0.68%(男0.73%,女0.61%)に相當す。年齢は50歳代に最多數にして、次で10歳,20歳代に多く、30歳代には非常に少數なり。尙ほ最低發生年齢は4歳,最高發生年齢は79歳,職業は農業,商業最多なり。各年度別發生數を見ると、昭和12年度に最多にして8,9,10年度之に次ぎ、3,11年度最も少し、而して之等と岡山市に於ける平均氣温、平均湿度、平均降水量との個々の間には特別の關係なきもの如く、氣温高く、湿度大にして降雨量大なるときに頻發する如し。發生部位は軀幹、頭部に多く、自覺症狀は疼痛(76.4%)痒感(20%)其他(1.8%)無きもの(1.8%)の順にして高年者は疼痛、若年者は痒感を伴ふ者多し。又帯狀疱疹、單純性疱疹、水痘、多型滲出性紅斑、結節性紅斑の各月別發生數より觀察するに帯狀疱疹と多型滲出性紅斑、單純性疱疹と結節性紅斑とは類似の状態に存するを知る。

「電氣えひ」(Narke japonica)ノ電氣器官及び其の他2—3組織の「アセチルコリン」及び「コリンエステラーゼ」の含有量に就て

生理學教室 小坂 眞吾  
河野 眞實

吾々は日本産「電氣えひ」の(イ)電氣器官、(ロ)中樞神經及び(ハ)各種筋組織内に含有せらるる「アセチルコリン」及び「コリンエステラーゼ」の量を蛙直腹筋を以てする生物學的検査法によつて定量し、次の如き成績を得たり。1.各組織1gについての「アセチルコリン」量は電氣器官8.5—15.0γ(平均12.0γ)にして、該器官に至る神經を刺戟するも含量に變化を與へず。2.中樞神經及び骨格筋に於ける含量は夫々4.4—5.2γ及び0.0—1.1γなり。中間筋と稱する特殊の筋肉は認むべき「アセチルコリン」を含有せず。3.«コリンエステラーゼ」の含有量は電氣器官が最も多く、次いで中樞神經、骨格筋の順序に少くなり、中間筋では最も少い。4.金魚の中樞神經及び骨格筋の「コリンエステラーゼ」の含量は電氣器官のそれを1とすれば夫々其の0.07及び0.017に相當す。5.«電氣えひ」の各種組織の「アセチルコリン」及び「コリンエステラーゼ」の含有量の間には緊密な並行關係が認められる。

海狸肝臟腐敗時に於ける「ヒヨール酸」及び「トリオキシ・イソ・ステロ・ヒヨレン酸」の酸化物に就て

生化學教室 岡崎 遜也  
岩城 寛治

1940年森は「ミリウス」の實驗を追試し「ヒヨール酸」を加へたる牛膀胱腐敗産物から「デオキシ・ヒヨール酸」を分離し、佐々木(1940)は海狸肝臟粥中に於て「ヒヨール酸」が「デヒドロ・ヒヨール酸」に又金光(1942)は「ヘノ・デオキシ・ヒヨール酸」が「3オキシ・ヒケトヒヨラン酸」に夫々酸化せ

られる事を認めたりしが著者の1人岩城は「トリオキシ・プロステロ・ヒヨレン酸」を海狸に與へ之が「ヒヨール酸」と「デスオキシ・ヒヨール酸」=分解せられる事を認めてよりかかる高級膽汁酸は生體臟器内に於ては之が先づ「ヒヨール酸」となり次いで之が酸化還元の結果酸素数の少ない「デスオキシ・ヒヨール酸」に移行する事を決定したるが、かかる普通炭素24の膽汁酸生成機構を更に明かにせんと思ひ著者等は「ヒヨール酸」又は「トリオキシ・イソ・ステロ・ヒヨレン酸」ヲ細査せる海狸肝臟と共に孵卵器(37—38度)内に入れ腐敗せしめたりしに「ヒヨール酸」よりは「デヒドロ・ヒヨール酸」と「デスオキシ・ヒヨール酸」「β3オキシ7ケト・ヒヨラン酸」と思はれる物資を、「トリオキシ・イソ・ステロ・ヒヨレン酸」よりは其の「トリケト酸」を分離せり。依つて腐敗の際「ヒヨール酸」より「デスオキシ・ヒヨール酸」が生成されるには「ヒヨール酸」が先づ「デヒドロ・ヒヨール酸」となり之が「レドクト・デヒドロ・ヒヨール酸」を経て「β3オキシ・12ケト・ヒヨラン酸」となり之が更に「デスオキシ・ヒヨール酸」に還元せられるものと考えざるを至當とす。

一 鳶・鳥及び鶺鴒の膽汁に就て

岡崎 遜也  
 生化学教室 岩城 寛治  
 金 光 邁

著者等は鳶・鳥及び鶺鴒の膽汁成分を常法に依り検査し、次の表の如き結果を得たり。

	膽汁量	「ヘノ・デゾキシ・ヒヨール酸バリユーム鹽」	「ヒヨール酸」の異性體	「ヒヨール酸」
鳶	60 cc	120 mg	50 mg	—
鳥	40 cc	300 mg	—	8 mg
鶺鴒	60 cc	250 mg	—	15 mg

即ち之等鳥類の膽汁は他の多くの鳥類の如く其の主成分として「ヘノ・デゾキシ・ヒヨール酸」を含有し、尚ほ鳥及び鶺鴒の膽汁には少量の「ヒヨ

ール酸」を含有するが、鳶の膽汁には稍々多量の「ヒヨール酸」の異性體を含有する事を知れり。

有尾兩棲類に於ける平衡支持杖の消長に就いて(特に岡山縣産「ヒノビウス」に於ける検索)

解剖學教室 塚脇 篤太郎

有尾兩棲類平衡支持杖の運命に關する文獻を通覽するに *Diemictylus pyeshogaster* (「イモリ」)に於ては發育完成の後漸次其の長さを減し最後に消失するとなす短縮説 *Amblystoma punctation* 及び *Hynobiuslarven* に於ては其の支持杖基部に表皮層細胞侵入し一種の栓狀物となり、該箇所より脱落するとなす脱落説。又 *Hynobius nebulosis* に於て孵化後2週間に於て突如消失するとなす突如脱落説等動物の種類及び研究者によりて未だ歸一せる結論に立到らざるが如し。此處に於て余は之を形態學的並に發生學的立場より研究し従來の研究を補足追加を試みたる所次の如き結果を得たり。(1) 本動物に於ける平衡支持杖は體長8mmの胎仔に於て表皮の胞厚として先づ左側に發現し右側に於ては稍々其の發育後れたり。(2) 平衡支持杖は細長き管狀を呈し其の發育方向は腹外尾方側に向つて發育増殖す。(3) 體長19mm胎仔に至れば左側平衡支持杖は消失し次いで右側は體長20mm胎仔に至りて消失す。(4) 平衡支持杖の發育に關しては方形軟骨は關與せず。(5) 而してこの脱落の原因は平衡支持杖の基部外皮内層細胞増殖して其の基部管腔を閉塞しために栄養障礙を來すがためなるべし。

大腸菌による「デヒドロ・ヒオデスオキシ・ヒヨール酸」の還元就て

生化学教室 岩城 寛治

「ケト型」膽汁酸に於ける各「ケト基」の還元受容能に就て大腸菌生體内及び接觸等に於ける還元の難易は既に明かにせられてゐるが、大腸菌の還元

作用で「ケト酸」核炭素 3, 7, 6 位のものの還元  
順位が未だ明かでない故、著者は「ケト酸」として  
「デヒドロ・ヒオデスオキシ・ヒヨール酸」を用ひて  
之に大腸菌を作用せしめて其の反應生成物を検査  
し「3. オキシ・6. ケトヒヨラン酸」と「ヒオデスオキ  
シ・ヒヨール酸」を分離し得た故に「ケト酸」核炭素  
3 位と 6 位が大腸菌により容易に還元せられるも  
3 位のは 6 位のものより優先的に還元せらる  
る事を證明したり。

#### 腹膜炎に於ける腹膜下結合組織の細胞の 變化(「マウス」に就ての検査)

解剖學教室 富永忠人

近時特に外科方面より多大の關心をもつて研究  
が進められてゐる腹膜炎に際して、腹膜下の鬆疎  
結合組織の細胞が如何に變化し、またその變化が  
如何なる部位の結合組織まで及ぶかを、成熟した  
「マウス」の腹膜腔内に「クロトン油」、又は大腸菌  
「ワクチン」を注入し、4 時間、10 時間、24 時間、

2 日、4 日後に各動物の腹壁の一部を切り取り、  
「チエロイヂン」切片を作り、「鐵ヘマテイン・ラツ  
ク」法で染色して検査した。先づ「クロトン油」注  
入の場合であるが、4 時間後に於て腹膜下鬆疎結  
合組織の線維細胞から既に多數の組織球、單核球  
白血球が生じた。10—24 時間後に於ては細胞の變  
化は更に著しく、組織球と單核球が一層増加した。  
之等の變化は腹膜下の結合組織のみに止まらず、  
腹膜に近い筋組織中の結合組織にも及び、その  
線維細胞を刺戟賦活して盛んに單核球と組織球を  
産生し動員する。かく多數産生動員された組織球  
が直接間接に腹膜炎に對して防禦的に又治癒的に  
主要な役をなすものなること疑ひない。2—4 日後  
には變化した細胞は漸次再びもとの線維細胞の形  
に復歸し、腹膜下組織は遂に従常の組織像を呈す  
る、次に大腸菌「ワクチン」注入の際は大体同様の  
變化を生ずるも、細胞の變化はやや軽度であつ  
た。